

特集 コロナ禍の中で迎える 10年目の3・11



上：関西電力に対する抗議デモに参加して大阪市内を歩く、原発いらない福島の女たち



右：皆が様々なプラカードを持ち寄り掲げる金曜行動

あの3・11から10年が経って

黒田 節子

■緊急避難

『親愛なる皆さんへ…最大・最良の行動は、今、原発からなるべく離れることだと思えます。私たちは、緊急に会津に逃げます。友人も南へ、西へ逃げています。電話が不通です。メール可能が多い。間もなく移動します。PCはいつも開くことはできなくなります。携帯アドは〇〇です。共に生きましょう！道を開きましょう！』

こんなメールを日頃世話になっている人たちに送ったのは、2011.3.13の朝8時過ぎ。大地震からおよそ40時間。翌々日15日が最も高い放射線値を出しているから、福島第1原発では危機的な状況に刻々と陥り始めていた頃だ。あれから間もなく10年。10年という長さは人間の一生から言えは相当なものだ。独身だった娘が結婚し、孫が3人生まれる（孫の1人は、なんと3・11が誕生日とか）。これは親しい友人の話である。

あのとき私は緊急避難をしたものの、生活の事情というものがあまりほどなく帰宅。今、事故直後に書いたものを少し読み返してみている。いやおうなしに、ざわざわ感がよみがえる。その中で「途方もないほどの被害と苦しみを伴いながらも、しかし、突然、ハイロは向こうからやってきた」という一文があった。つまり、これだけの事故があったのだから日本は脱原発へ大きくカーブを切るだろうと、惨劇後の「新しい世界」に少なからず期待を持ったことを思い出す。一瞬であれ、大きなしかも甘い勘違いをした自分がとても口悔しく腹立たしい。

『2011年5月25日現在、私の住む郡山市の放射線値（公表）は1.3μSv/h（編注：マイクロシーベルト/時）前後。福島県内の学校の75%が放射能「管理区域」レベルの汚染、20%が「個別被ばく管理」が必要なレベルの汚染状況にある。子どもたちを全員「放射線管理責任者」にして、原発内で遊ばせているようなものだ。子どもと妊

産婦をまず早急に退避させるべき』

同年5月3日には早くも山下俊一が県内各地を講演して回り、ニコニコしていれば放射能は大丈夫と迷言を放ち続けるなど、事実の隠ぺいと放射能の過小評価はその後の展開の通りである。溶け落ちたままの核燃料・増える健康被害・避難者住宅支援の打ち切り（2倍の家賃を払えと訴えられる！）・汚染土壌・焼却炉問題・被ばく労働・復興庁パンフ「放射線のホント」等による一大「ウソ」キャンペーン・矛盾だらけの東京五輪・汚染水の海洋投棄etc.

10年経った。年間許容量1mSv（編注：ミリシーベルト）は「長期的な目標」と遠ざけられ、実際の除染や帰還では20mSvが幅を利かしている。除染で出た土を農地に再生利用する実証事業が行われている飯館村で、野菜は基準値を大幅に下回っていたと報告された。「解除になった地域と同じような栽培ができるのではないか」との住民の話をマスコミは流す。しかし、この「基準値」とは1キロあたり100ベクレル。事故前の日本の食べ物は0・1ベクレル程度だったから、10000倍の汚染を許すという数値になるのだ。

原発とはまさに事程左様にあからさま

な、あるいは微妙な言い回しのウソによって維持されているということを生活の中に学んだ10年でもあった。それにしても、地域の人たちの苦勞と希望をモチーフに、つい涙を誘うような「復興」「よく頑張ったですね」トーンの映像を日々テレビで見せられたら、たいがいはホロっと騙されてしまふ。でも、その放射能の数値はいったいどうなんだ？ それもちゃんといいなさいよ！

■避難者の苦痛をよそに、何がなんでも「復興」

想像して欲しい。県外の見知らぬ土地に突然移り住むことになれば、仕事にしろ、近所付き合いにしろ、県内に住むよりもずっと大変なことだ。福島にいたときは活躍していたのに、移住した後ふさいでいる人もいると聞いていた。私の知人に母子で遠方に避難した人がいたが、避難先では精神的にひどく参ってしまい、薬に依存するようになってしまった。お母さんのそういう姿を見ては、子どもが泣くということ聞いて胸がふさがれる思いだった。しかし年月は人を助けることもできる。今では原発関係の集会に出て発言もできるようになったと聞く。やつとの思いで新しい生活が築かれつ

つあるというのに、唯一の公的支援だった家賃補助が打ち切られた（2017年）。あるいは、2020年12月、原発事故の避難区域を抱えた周辺12市町村への移住・定住を促進する事業として、50億円を確保することで復興相と財務相が合意したと発表があった。5年以上定住の意思を示し、地元企業などに就業する移住者には直接支援もする。2人以上の世帯移住に200万円、単身者には120万円を支給。5年以内に起業した場合は経費の4分の3を上限に最大400万円を手当てするというものだ。フクシマの「復興」とは何だろうか。少なくとも、帰還を強要するという政策が非人間的、非人道的な措置であることだけは間違いない。

■保育所、ハローワークで

事故当時は市の臨時職員として保育所で働いていた。14時46分、お昼寝が終わり、おやつ準備をしていたとき、グラグラッと来た。子どもたちをパニックで走り回らせたりしたら大変なので、その部屋の保母2人でシートやバスタオルなどで子どもたちの身体を抑える。何人かの子は恐怖のあまり、立ったままおしっこをジャージャーとお漏らしした。建物が倒壊しなかったのは幸いだった。そうこうしている間に、親

たちが青い顔をして迎えに続々とやってくる。

古い5階建て団地の一番下に住んでいた私は、阪神大震災時に1階がつぶれたビルの映像を思い出し、部屋にいるかもしれない家人の安否が気がかりだが、子どもたちの誘導に精一杯で電話することもできなかった。帰宅してみれば、隣の大きな一棟が少し傾いたのに驚愕した。冷蔵庫が飛び跳ね、すぐに水道が止まったという。翌日、近くの公園に延々と並んで給水車から水をもらう。あのとき空がとても青く、まぶしかったのを鮮明に覚えている。雲が流れていた。「原発から放射能が流れているに違いない」。その直感は当たっていたが、まだ個人で検知器を持つてはいなかったし、テレビでもマイクロシーベルトの話は全然だった。緊急避難を決意させたのは、直接的にはこの生活水の問題が大きかった。

10日余りで群馬での緊急避難を止めて帰宅する。せっかく帰ったものの保育所では仕事を解除された。つまり登園する子どもが急に少なくなったこともあり、一年契約の継続がこの年はなされなかったのだ。臨時の身分の悲しさ。しかし、これを不当と自治労に相談。何回か交渉したもののラチ

はあかず、ハローワークに通うことに。

思いがけず、そこは原発から避難している人たちであふれかえっていたのである。人いきれでムンムンの中、受付の順番を立てて並んでいるときのこと。列の近くで押し殺すようにして泣いている若い女性がいた。隣にいる人が慰めている。原発から着の身着のまま逃げてきて、今、どこかの避難所に割り当てられた人たちだろうか。不案内な街のハローワークで、いくばくかの失業手当をもらうために並んでいる。これから自分は、家族はいたいどうなるだろうか、彼女の涙はまたあの場にいた多くの人たちの不安と悲嘆の涙に相違なかった。

■避難所での日々

つらい涙では、いまだ記憶に残るものがある。ビッグパレット（イベント施設）という県内最大の2500人も収容された避難所では、女たちだけの部屋を市内の女性市民グループの協力でなんとか確保した。混乱の中で女たちを性暴力から守り、安心して授乳し、お茶を飲んだりできるところが必要だった。そこに当番で入っていたときのこと。わずかな時間を休息のために部屋にきた原発現地からの一人の役場職員と雑談しているうちに、彼女がどっと泣

き出したのだ。自分の子どもたちのことも心配なのに避難所での仕事は多忙を極め、思わず堰を切った感情があふれ出たという感じだった。信頼され、気丈夫に目一杯動き回っている人だった。あの日あの人たちは、いま元気でいるだろうか。

事故直後の避難所の様子は数字や統計上にはけっして表出できないものがあり、これを多くの人に知ってもらいたいと思う。

部屋 of 場所取りは「弱肉強食」という言葉を使い出すものがあつた。海外というより、アジアからの女性たちが一つの部屋の片隅でひとかたまりになっていたのを見かけた。彼女らに助け合う仲間がいて良かった。彼女らに同時に、これはひとかたまりにならざるを得ない状況がそこにあったことを示していて、とても複雑な気持ちにさせられた。災害時性暴力がつきまとう中、彼女らは、女たちは大丈夫だっただろうか。家族や親類縁者のいない高齢者も大変だった。緊急時、避難所のトイレはものすごく汚れている。3月、4月はまだまだ雨風の冷たい郡山だ。場所取りでトイレの出入口前にいるしかなかった一人のおじいさんが横になっている。身動きもできず、トイレに行きかう人の汚れた足の動きを見つめるおじいさんの寝床の上には、取り替

用のおむつだけが積まれていた。こうした光景がいつまでも脳裏に焼き付いている。

一方、「戦場」の中での出会いもあった。福岡から「家が空いています」と避難受け入れの情報を持ってウロウロしている人と、「お話、聴きます」の小さなプラカードを持ってこれまたウロウロの私。ウロウロ同士ピンときたのか、偶然の意気投合。その後の交流は10年たった今も続いている。

私が体験しているのは避難所でのごく初期のことである。それに、どこの避難所でも同じようだったとは思わない。もっと小規模で安心できる所やスペースに余裕のある場所ではまた違っただろうが、あのときの避難所のことを私は多分一生忘れないと思う。人間をあのような状況に追い込んでほならない、と強く思うのだ。戦争というものがないともうだったように、人は状況次第で惨いことをやってしまう。そして、天災であれ人災であれ原発は事故を起こすものだと思えば、一日も早く原発をストップしなければいけないのは、もはや明々白々。二度とフクシマの経験を繰り返してはならない。

■そして、振り返れば、

近年、郡山駅前金曜行動と一緒にやって

いた友人が3名も亡くなっている。Mさんはガンだったが、発症する前は早朝の市内ランニングをやっていた。「放射能を吸い込むんじゃないの？」と冗談めかしていたことがある。商売開始前に、頑張り屋さんの彼女は毎朝身体を鍛えるために走っていたのだ。

2人の男性は急性心筋梗塞。駅前広場で大声で訴えるH氏の定番演説は「皆さん、息をしないで！放射能が口や鼻から入ってくるから！」だった。急逝した3人とも人一倍元気で、まだまだこれから一緒に活動できる仲間だったことが何とも悔しい。

3・11直後、「原発いらない福島の人たち」というグループを作った。振り返れば、10年どころではなく、まるで20年ぐらい経ってしまったかのような感慨がある。フクシマを訴えて、原発を何としてもストップさせたかった。様々なアクション。そうして、避難した人、いつしか離れて行った人、倒れてしまった人。今、フクシマの混迷の只中にまた人たちの葛藤もある。終わりのない映画を見ているようなしんどさを感じつつ、しかし終わりがナイなんてことはナイのだと、先輩たちがそう教えている。ひとつひとつ、なるべく誠実にやるだけか。

フクシマは福島だけの問題ではないといわれて久しいが、昔から蝦夷（エミシ、エゾ）と呼ばれ差別され、現代では「核」を押し付けられている東北や北海道で、粘り強く抗っている人々と情報を共有してさらに繋がっていききたい、なんて想うこのごろです。

（くらだ・せつこ／原発いらない福島の人たち、他）

■今年も3・11に

「第10回 原発いらない地球（いのち）のつどい」

開催■

主な内容は、この10年を振り返り、女たちひとりひとりがそれぞれ話すというような企画としました。コロナで部屋の人数制限があり、ZOOM参加可という初めての試みです。

○とき：2021年3月11日（木）13：00～14：00

○ところ：郡山市内

○主催：原発いらない福島の人たち

★他に…3・10午後の朴保ライブ（要予約）、3・11「つどい」後に郡山市内デモ行進。プラカードや鳴り物歓迎。これらは有志主催です（問い合わせ先：080-6254-6256）。